

廃棄物処分場周辺コミュニティに関する人類学的研究

—フィリピンセブ市を事例として—

18RB104 小黒歩実¹

指導教員 藤掛洋子

【背景と目的】ILOによると、2016年時点で世界の労働人口（15歳以上）の51.9%がインフォーマルセクターで働いている [ILO 2018]。そのなかでも、ウェイストピッカーは典型的なインフォーマルセクターの仕事であるとされている [Medina 2007]。現在、フォーマル/インフォーマルという概念は、人々の多様な活動を説明するのにも用いられ、幅広い場面で使用されている。しかし、その定義については議論が続けられている。このように概念上のフォーマルとインフォーマルの境界が揺れ動くなか、実際の人々の生活のなかで両者がどのように立ち現れてくるのだろうか。

また、ウェイストピッカーは典型的なインフォーマルセクターの仕事だけでなく、貧困の象徴としても特徴づけられており、ウェイストピッカーを対象とした研究は多い。一方で、処分場周辺コミュニティに住むウェイストピッカー以外の住民は看過されてきた。しかし、彼(女)たちにとっても処分場が近くにあるという理由から、廃棄物は切り離せない存在である。では、ウェイストピッカー以外の住民と廃棄物との関わりはどのようなものだろうか。

本研究は、フィリピンセブ市を対象に、ウェイストピッカー以外の住民にも焦点を当てることで、処分場周辺コミュニティの実態を明らかにすることを目的とする。そして、実態を明らかにするなかで、以下の2つの問いに答えていく。

問い① 住民の生活のなかでフォーマルとインフォーマルがどのように立ち現れるのか

問い② 住民と廃棄物の関係はいかなるものか

【研究方法】エスノグラフィー研究

【調査方法】現地調査: 参与観察、スノーボーリング方式の半構造化インタビュー

電話インタビュー: 半構造化インタビュー

【結果及び考察】本研究の調査地であるD地区には645世帯が居住している。住民の多くが非正規居住であることや基本的インフラの欠如、居住環境の悪さから、D地

区はスラムコミュニティであるといえる。D地区には、ウェイストピッカーが行う有価物回収以外にも廃棄物関連の経済活動が活発に行われており、住民自身がつくりだした経済活動も多い。それらの経済活動のなかには、フォーマルセクターに分類されるものもあるが、内部ではインフォーマルな実践が目立っていた。また、D地区では、ウェイストピッカーの協同組合が活動を行っている。その活動の経緯からは、協同組合のフォーマルな論理とウェイストピッカーらのインフォーマルな論理がせめぎ合っている様子がうかがえた。

D地区では、ウェイストピッカー以外の住民もアライスと呼ばれる食品廃棄物や残飯を食べたことがあると報告しており、住民にとって廃棄物は恩恵をもたらす存在であると言える。しかしながら、住民は廃棄物に対してポジティブなまなざしだけを持っているわけではなく、ネガティブなまなざしを持ち合わせていた。加えて、廃棄物に関わることで世間からもネガティブなまなざしを向けられるなかで、住民は葛藤を抱えていた。

【結論】まず、問い①について、D地区の住民の生活において、フォーマルとインフォーマルは混在しており、両者の境界は曖昧であった。また、その境界はただ曖昧に存在するのではなく、フォーマルな論理とインフォーマルな論理のせめぎ合いの結果であるといえる。

問い②については、廃棄物は住民に恩恵をもたらすものである。しかしながら、廃棄物はD地区の地理的・社会的周縁化をもたらし、住民は廃棄物に対する自身の両義的なまなざしと世間のネガティブなまなざしのなかで葛藤しているなど、住民と廃棄物との関係は複雑であるといえる。

【参考文献】

ILO. 2018. Women and men in the informal economy: A statistical picture: 3rd edn. ILO.

Medina, M. 2007. *The World's Scavengers: Salvaging for Sustainable Consumption and Production*. AltaMira Press.

¹ Ayumi OGURO (横浜国立大学大学院)